

日本油化学会創立 70 周年記念事業 第 2 回世界オレオサイエンス会議 “WCOS 2022” (2022 年 8 月 23 日～9 月 3 日) の開催について

－ 研究成果の「完成性」よりも「斬新性」を優先した「選抜講演」
を多く導入した「トップカンファレンス」志向の国際会議 －

日本油化学会創立 70 周年記念事業 実行員会委員長 朝倉 浩一



まずは、読者の皆様に「本稿を読んでみたい」と思っただけのよう、(偉大なる先輩方からのご批判は承知で、) やや衝撃的な書き出しとさせていただきます。

- ・ 著名研究者による、その偉大な業績を総説した大講演
- ・ (例え無名な研究者の発表であっても)「エッ、そんな研究あったの!」と驚かされる粗削りだけれど斬新な内容の発表

2017 年度に設立された年会改革推進委員会は、同年度末に第 1 回の答申を提出するまで、年会の魅力の最大化に向けた議論を重ねました。特に、年会で聞きたい内容について議論した際、前者は委員のほぼ全員が最下位に、逆に後者は委員のほぼ最上位に挙げました。(発表する側としてではなく、聞く側としてですが) 年会に参加する最大の動機は、新鮮な一次情報の獲得であって、壮大なセレモニーへの同席ではないというのが主たる理由です。

さて、本稿タイトル中に出てくる「トップカンファレンス」、化学系の研究者や技術者にとってはあまり聞きなれない言葉かと思えます。勤務先の慶應義塾大学の大学院理工学研究科は、学部とは全く異なった組織構成となっていて、基礎理工学専攻、総合デザイン工学専攻、開放環境科学専攻の 3 専攻しかなく、現在、開放環境科学専攻の専攻長を務めております。この専攻に所属する教員は、学部組織では管理工学科と情報工学科の全員、機械工学科とシステムデザイン工学科の約半数、私が所属する応用化学科の約 2 割、さらには外国語・総合教育教室から 2 人です。このような多様な分野の教員が集う組織においても、学位授与や教員の採用・昇格審査の際には客観的評価が必要です。そして、我々化学系の者にとっては「査読付き学術論文」が最も優先的に評価されますが、情報系においてはそれよりも「トップカンファレンス」での発表の採択の方が高い評価を受けることがあります。その理由は、世の中にその研究内容が公開される速度によるものです。皆様も経験されていると思いますが、論文を執筆する際には、通常は、研究結果の先進性のみならず完成性も大いに意識します。そしてその内容を投稿

した後に査読があり、その査読結果に基づいて原稿の改訂をして再投稿し、さらに再び査読されというサイクルが繰り返されます。そして、情報系の分野においては技術の進歩の速度が非常に速いので、このような完成性を意識した論文執筆や査読と改訂の繰り返しをしている間に、その内容が色褪せてしまう可能性が高くなってしまいます。そこで、「トップカンファレンス」、すなわちその分野における最高権威の国際会議に会議論文を提出して発表を申し込み、そしてそれが採択されて発表できることが高い評価につながります。

一方、前述したように、日本油化学会においても、「年会で聞きたいのは『エッ、そんな研究あったの!』と驚かされる粗削りだけれど斬新な内容の発表」であるということは、「トップカンファレンス」志向は、決して情報系分野に限られないということを物語っています。この度、日本油化学会創立 70 周年記念事業として開催される WCOS 2022 の目玉企画は、「選抜講演」です。昨年の 9～12 月にこの選抜講演の候補者を一般公募し、野々村委員長をはじめとしたプログラム委員会委員の方々が専門部会の方々の協力を受けて、「トップカンファレンス」志向で、完成性よりも斬新性の高い約 30 件の発表を選抜くださいました。

一方、発表者の方からすれば、是非とも自身の研究内容を偉大な先人達に認識してもらいたいという欲求はあるはずです。偉大な先人達とは、Kaufmann Memorial Lecture、ISF Plenary Lecture、JOCS-AOCS Joint Meeting などで交流できるはずです。コロナ禍も発生から既に丸 2 年が経過しましたが、(特に海外の感染状況を見ると) まだとても対面形式での国際会議の開催は困難と判断し、バーチャル開催となります。しかしながら、バーチャル開催とすることを決断しました。世界中のより多くの研究者が皆様の発表に触れる機会が増える可能性もあります。一般講演は 3 月 1 日より募集を開始し、その締め切りは 6 月 30 日です。お一人でも多くの方の発表申し込みをお待ちしておりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

(慶應義塾大学教授)